第37期静岡県社会教育委員会報告書（概要）

諮問題　**誰もが共に学び合う生涯学習社会の形成に向けて** **–全ての人が参画し、共に学び合う社会教育のあり方–**

前期社会教育委員会では、社会教育を推進する上で、生活上の困難を抱えた社会的に孤立しがちな人々へのアプローチが難しく、全ての人に学びの機会が届けられていない現状が報告され、今後の課題として挙げられた。

第１章　誰もが共に学び合う生涯学習社会の現状と課題

・様々な背景を有する人たち（障害、外国籍（言語文化）、高齢者など）には、学習機会が十分ではない。

・障害がある人たちについて（H30 年度「学校卒業後の障害者が学習活動に参加する際の阻害要因・促進要因等に関する調査研究」より）

【生涯学習に関する課題】学ぶ場に出かけていく勇気がない、あまりない　62.9％

【支援体制の有無】障害のある人の学習活動の支援に関わる「組織」がある　3.3％

・外国籍の人たちについて（令和２年度「静岡県多文化共生基礎調査」より）

【県や市に望む行政サービス】外国人の日本語学習を支援する　41.9％

【団体や行事に積極的に参加】自治体やボランティアによる日本語教室に積極的に参加したことがある　3.0％

第２章　誰もが共に学び合う生涯学習社会の形成を阻む要因「孤立」とその分析

【孤立の分析】

「参加の意思表示の有無にかかわらず、学習活動へ参加を必要としているのに参加できずにいる」孤立しがちな人を生じさせているのは、その「**人**」が持つ様々な背景ではなく、社会の側の「**状況**」が要因だと考えられる。

【孤立を作り出す**状況**】

①社会全体に困り感の理解が得られていない

根底に、共に学び合う学習者や学習支援者を含む社会全体に困り感の理解が得られていない。

②学習機会及び活動の情報を届けられていない

情報の内容が、受け手にとってわかりづらく、情報を受け取る手段が限られ、届いていない。

③学ぶこと、つながることへの安心感がない

学ぶことに対する安心感が持てない。学びを通してつながることへの不安が拭えない。

☆誰もが共に学び合う学習機会がまだ十分でない

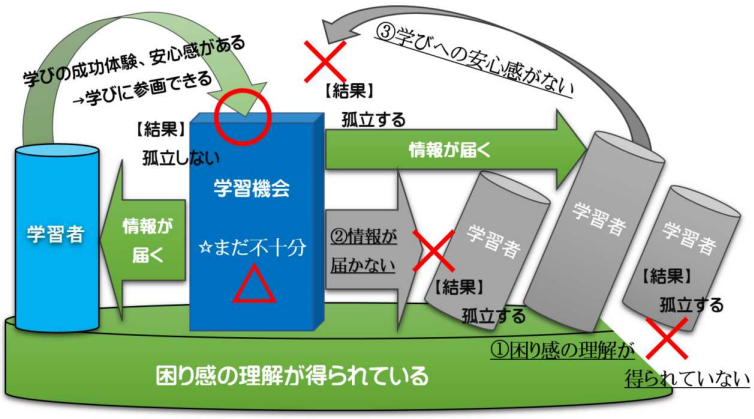

図　孤立を作り出す状況

第３章　誰もが共に学び合うための生涯学習社会の形成に向けた手立て

(1)「社会教育」の自由な学び合いで、孤立の「状況」を打開する

・社会教育には、教える・教わるという関係性が固定的ではなく、学びの場にいるお互いが学び合い教え合うという特長がある。 また、学習者それぞれの自由な学びをその人に合わせた形で提供・支援できるという特長がある。

・孤立を作り出す「状況」を打開し、誰もが共に学び合う生涯学習社会を形成していくには、これらの特長を持った社会教育が積極的に関わる必要がある。

(2) 孤立を作り出す状況を打開するために大切にしたい考え方

【①「社会全体に困り感の理解が得られていない」状況の打開策】 ⇒ キーワード「**体験**」・「**交流**」

困り感の理解には、人それぞれの特性(多様性)を実体験から知る事が大切である。また、多くの人と交流することを学校教育や社会教育（野外活動など）の場で、幼少期から経験することが大切である。これらは、個々の持ち味を相互に評価し合っていく地域共生社会の実現のためにも重要である。

【②「学習機会及び活動の情報を届けられていない」状況の打開策】 ⇒ キーワード「**一人一人**」・「**当事者の目線**」

必要な情報を届けたからといって、すぐに学習機会に参加できるとは限らない。そのため、一人一人の事情を理解し、当事者の目線で考えられた、その人に必要な情報を丁寧に届けることが重要である。

【③「学ぶこと、つながることへの安心感がない」状況の打開策】 ⇒ キーワード「**学ぶ楽しさ**」・「**居場所づくり**」

［学びそのものに対する安心感］

学習機会に新たに参加することは誰もが勇気がいる。魅力ある学習内容で、学習成果が身近に活用できるような、学習者が主体的に参加できる学習プログラムを組むことが重要である。

［共に学び合うことに対する安心感］

今後、共に学び合う学習機会を通じて、孤立を作り出す状況の解消に発展していった事例を積み重ねていくことが、孤立しがちな人の助けになる。現代社会において、まずは身近な地域に、ただ集まれる居場所を創出することが大切である。

(3)「学習機会・施設」の充実に向けて ⇒ キーワード「**連携**」・「**人材**」

教育や学習の固定概念にとらわれることなく、学習者理解に努めようとする関係者が、必要な部署と連携し、学習者のニーズに合った学習機会を充実させていくことが重要である。

(4) 孤立を自分にも起こり得る状況と捉えて、お互いに認め合い学び合う社会へ

・一人一人の理解に努め、存在を認め合い、寄り添って、学習行動へといざなうことが、今後の生涯学習支援には重要と考える。

・自分自身も一学習者であり、孤立を作り出す状況に遭遇すれば孤立に陥る可能性のある己自身であることを前提に、自分自身の問題として、丁寧に一人一人にアプローチすることが、支援において何にも増して必要である。